

出羽・陸奥両国における叡尊教団の展開

松尾 剛次

(山形大学名誉教授)

はじめに

奈良西大寺叡尊をいわば祖師とする叡尊教団は、一三世紀後半から一五世紀まで、中世日本の全国に末寺を展開するなど、中世仏教を代表する教団の一つであった。その具体的な展開のありようについては、別著において論じた¹が、出羽国（現、山形県・秋田県）と陸奥国（青森県・岩手県・宮城県・福島県）における中世叡尊教団の展開については、論じ残してきた。

というのは、明徳二（一三九一）年九月二八日に書き改められたという「西大寺末寺帳」²（以下、「明徳末寺帳」と略す）によれば、菩提寺なる西大寺末寺が出羽国に所在したことはわかっているが、菩提寺がどこに所在したのかなどがはっきりしなかったからである。そのために、私の叡尊教団の全国的展開に関する研究³では、分析を行わなかった。だが、近年の小野寺氏に関する研究⁴の進展によって、ようやく手がかりが得られたので、本稿で論じてみる。

また、陸奥国については、私の調査が進んでいなかったからであ

出羽・陸奥両国における叡尊教団の展開

る。今回、ようやく調査が進んだので、ここで論じる。

第一章 叡尊教団の出羽における展開

第一節 西大寺関係の寺院出羽長谷寺と直末寺菩提寺

中世叡尊教団が、出羽国にも展開していたことは、『山形県史』によって、すでに触れられている⁵。すなわち、弘安三年（二二八〇）年に記された叡尊直弟子名簿である「授菩薩戒弟子交名」⁶の一人前の僧である「比丘衆」の項に出羽国人として「静海・乗道房」⁷、「幸意・願智房」⁸、「光円・道妙房」⁹の三人が挙がっている。また、西大寺に現住している修行中の雛僧である形同沙弥として「静照・覚真房 三十九」が記載されている。それゆえ、叡尊教団に出羽国人が参加していたことは明らかである。

さらに叡尊教団関係者の物故者名簿といえる「光明真言過去帳」にも、次の史料（一）のように出羽長谷寺の三融房が挙がっている。この出羽長谷寺と三融房については従来全く指摘されてこなかった。

史料（一）^{*10}

心月房	浄住寺	三融房	出羽長谷寺
圓悟房	戒光寺長老	観良房	般若寺

禅信房 當寺住 教願房 竹林寺長老

・實想房 戒壇院長老 （後略）

すなわち、出羽長谷寺の三融房が、文永九（一二七二）年七月二八日に死去した。¹¹京都淨住寺開山心月房定然（俗名葉室定嗣）と、建治三（一二七七）年一〇月二三日に亡くなった。¹²東大寺戒壇院長老實想房円照の間に記されている。三融房は、文永九（一二七二）年から建治三（一二七七）年の間に亡くなったのであろう。それゆえ、一三世紀後半の出羽に、長谷寺という叡尊教団関係の寺院があったことがわかる。

ただし、出羽といっても、現在の山形県なのか秋田県なのかはつきりせず、先述の『山形県史』が、先の四人をあたかも山形県関係僧として記述しているのは問題であるが、これまで触れてきた五人の僧と出羽長谷寺が山形県、あるいは秋田県に関わるのかなどについては確認できなかった。

ところが、次の出羽菩提寺については、秋田県に所在したと考えられる。

史料（二）^{*13}

出羽国

菩提寺 応永十八年七月一日旦那小野寺殿第廿一代和上御時当寺附了四室

史料（二）は、「明德末寺帳」の出羽国分である。「明德末寺帳」は、西大寺から直接長老（住職）が任命される直末寺を書き上げたもので、その記載の順序は、寺格を現している。¹⁴また、「明德末寺帳」には、明德二（一三九二）年九月二八日に書き改められたという奥付があるが、注記により、それ以後に直末寺化した寺院も記載されていた。¹⁵

さて、史料（二）によれば、先述のように出羽国に菩提寺という西大寺直末寺が所在したことがわかる。さらに、その注記により、応永一八（一四一一）年七月一日附で、旦那小野寺氏によって西大寺第二一代長老圓道房叡空¹⁶に寄付されたこと、また、光明真言会に際しては四室に宿泊することになっていたこと、がわかる。すなわち、菩提寺は応永一八年七月一日付けで西大寺直末寺となっていた。なお、圓道房叡空は、翌応永一九（一四一二）年に八〇歳で亡くなっている。¹⁷

もつとも、他寺、たとえば近江石心寺、備後浄土寺などの例から判断すれば¹⁸、西大寺門徒の僧が菩提寺に入ったのは、おそらくそれ以前からであろう。

以上のように、一五世紀の初頭に出羽菩提寺という叡尊教団の直末寺が出羽国に所在したことがわかる。また、寄付者の出羽小野寺氏といえ、後述のように、おそらく秋田県の小野寺氏であろう。

それゆえ、菩提寺は現在の秋田県内に所在したと考えられる¹⁹⁾。

ところで、ここで注意すべきことは、出羽国に叡尊教団の寺院が一箇寺しかなかったというわけではないということである。「明徳末寺帳」には、西大寺の直轄寺院といえる直末寺が挙がっているのであって、西大寺直末寺ではない氏寺で、叡尊教団の僧が入った律寺は他にあつたと考えられる点を忘れてはならない。史料(一)に載る出羽長谷寺もその一つであろう。また、基本的に三河国以東の直末寺は、鎌倉極楽寺配下であつた点にも注目すべきである²⁰⁾。

次にこの菩提寺はいつまで機能したのであろうか。このことを考えるうえで、史料(三)は重要である。

史料(三) * 21

四室分	相模国	常住金剛寺	足尾国
極楽寺	大和国	大岡寺	伊賀国
大御輪寺	伯耆国	鷲峰寺	讃岐国
国分寺	越中国	金光寺	備中国
弘正寺	越中国	国分寺	讃岐国
浄法寺	周防国	国分寺	讃岐国
宝光寺	加賀国	屋島寺	讃岐国
出羽国		国分寺	伊予国
菩提寺			

大隅国宮内	伊勢
正国寺	福善寺
越中	
圓満寺	長州
江州	蔵福寺
阿弥陀寺	タカ嶋郡新城庄ほり川

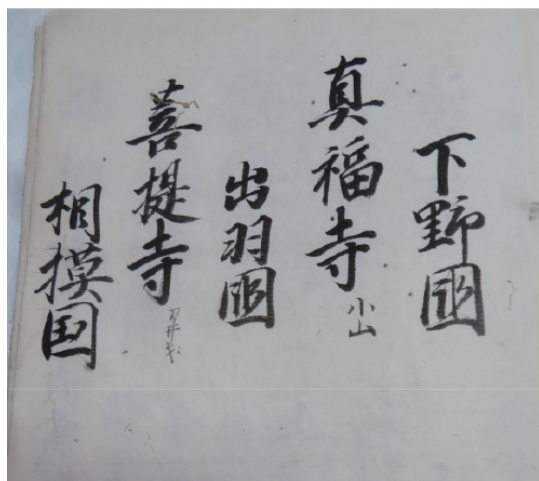
史料(三)は、永享八(一四三六)年三月日附の「坊々寄宿末寺帳」の一部である。「坊々寄宿末寺帳」は、毎年の光明真言会の際に全国の末寺から西大寺に集ってきた末寺の僧衆が寄宿する坊ごとに、その末寺を書き上げたもので、二〇〇箇寺が書き上げられている²²⁾。なお、光明真言会は叡尊が文永元(一二六四)年九月四日に西大寺建立の本願称徳女帝の忌日を期して、七昼夜にわたって亡者の追善、生者の現世利益のために光明真言を誦誦する法会であり、諸国の末寺から僧衆が集り、西大寺内に宿泊して法会を勤修する叡尊教団の年中行事の中で最大のものであつた²³⁾。

史料(三)によれば、菩提寺が四室分に見える。菩提寺は、出羽国から奈良西大寺で開催される光明真言会へ参加し、その際、四室に宿泊することになっていたのである。つまり、出羽菩提寺僧は、一五世紀前半において毎年奈良までやってきていたのである。

史料（四）^{* 24}

出羽國

菩提寺ト井ギ



史料（四）は、江戸時代の写本しか残っていないが、内容分析から、もともとは一四五三年から一四五七年にかけて作成されたと考えられる^{* 25}「西大寺末寺帳」の出羽国分である。

それによれば、一五世紀半ばにおいても、出羽菩提寺は西大寺直末寺であったことがわかる。また、菩提寺は、図のように、注記に

よりトイギに所在したことがわかる。この「トイギ」がどこかは不明である。

第二節 稲庭小野寺氏の祈祷寺としての菩提寺

さて、前節の分析によって、一五世紀初頭において出羽国にも西大寺直末寺として菩提寺が存在したことが明らかになった。とりわけ注目されるのは、応永一八（一四一一）年七月一日付けで、小野寺殿が菩提寺を第二一代西大寺長老に直末寺として寄付した点である。すなわち、ここに住持職任命権が小野寺氏から西大寺に移管したのである。

小野寺氏といえば、雄勝郡横手（現在の秋田県横手市）を本拠地とした小野寺氏が想起される。ゆえに、菩提寺も横手に所在したと一見考えられがちである。しかし、小野寺氏はその頃は、稲庭城（湯沢市稲庭町）を根拠地としていた。小野寺氏の横手盆地への本格的な進出は種道の代で、大永年間（一五二一―二八）に種道は稲庭城を二男晴道に譲り、横手盆地の沼館城を本拠としたという^{* 26}。それゆえ、応永一八年における根拠地は、稲庭城であったはずである。とすれば、小野寺氏の祈願所であった菩提寺は、稲庭に所在したのであろう。

稲庭小野寺氏の菩提寺院といえば、広沢寺が知られる。広沢寺

は、現在は曹洞宗寺院であるが、以前は川原毛に所在した前湯寺という古代寺院が、三途川に移転し、長祿元（一四五七）年に祖璨和尚が留錫し、長祿三（一四五九）年に稲庭に移転し、小野寺弥太郎道広が旦那として広沢寺と称した²⁷という。ここで問題としている菩提寺が前身寺院かもしれないが、今後の課題としたい。

一五世紀において、菩提寺の住持職を西大寺に寄付した小野寺氏の惣領とはだれであろうか。小野寺系図は数多く伝来し、錯綜している。それゆえ、その頃の稲庭小野寺氏の惣領がだれであるのか明確ではないが、『本莊市史通史編Ⅰ』は小野寺重道ではないか²⁸と考えている。小野寺重道は、応永三四（一四二四）年には將軍に馬数疋を進上している²⁹。また、永享二（一四三〇）年にも馬五疋を將軍義教に献じている³⁰。

しかしながら、小野寺氏系図は大いに錯綜し、重道は鎌倉時代の人物とする系図もある³¹。とりわけ、地元の『稲川町史』では、「稲庭城主小野寺家系図（広沢寺本）」に依拠して、建久四年（或いは建久元年、或いは文治五年）に重道が出羽雄勝郡に封ぜられ、下野国から稲庭に初めて入部したとする³²。それゆえ、一五世紀当時の惣領は「稲庭城主小野寺家系図」に見える応永三一（一四二四）年に死去した道利³³かも知れない。

また、佐々木千代治編『稲庭小野寺氏の研究』では「小野寺正

系図」がもつとも信頼できるとする³⁴。その系図に依拠すれば応永三二（一四二五）年に死去した氏道が当時の惣領となる（『稲庭小野寺氏の研究』一三一頁）。要するに、系図が錯綜し、当時の総領を確定できない。

ところで、小野寺氏によって菩提寺が西大寺に寄付されたことについては、小野寺氏が京都扶持衆として、京都に屋敷を有し、出羽における室町幕府の使節遵行体制を担っており、それゆえ叡尊教団を支える関係があったと推測されている³⁵。その可否を論じる史料はなく、今後の研究の深化に期待したい。後述する岩城の小河義綱と鎌倉極楽寺との関係を考えれば、小野寺氏が京都扶持衆として、京都に住んでいたことにより、京都などで叡尊教団の僧と関係を有するにいたった可能性は大いにありうる。

つぎに、出羽山形における叡尊教団の展開はどうであったのかが問題となる。山形県の寒河江慈恩寺には、「奥州国分寺」銘の入った柄香炉が慈恩寺本堂に伝わる。それにより後述する西大寺末寺の陸奥国分寺関係者が慈恩寺にいた可能性はあり、寒河江慈恩寺に叡尊教団の布教が広がっていたと推測される³⁶。

第二章 陸奥国における叡尊教団の展開

叡尊教団は陸奥国においても展開し、それについては『中世民衆

寺院の研究調査報告書』の研究などがある³⁷。ここでは、それをも参照しつつ考察を加える。

先に触れた「授菩薩戒弟子交名」に、比丘衆の一人として、陸奥出身の「陸奥国人 聖智 聖忍房」³⁸があがっているが、この人物に関してはこれ以上の史料がない。他方、鎌倉極楽寺真言院住持を勤め、忍性を補佐した心一房禅意が、陸奥国岩城の出身であったことは、後述するように岩城地域に西大寺末寺が展開していた背景を理解するうえで重要である。

史料（五）³⁹

（銘文）

奥州岩城郡東海道

所生相州極楽律寺

真言院住持比丘

禅意心一房遺骨

嘉元三年⁴⁰八月三十日

□□於真言院入滅⁴¹

六十五歳先師和尚之没

後納遺骨於額安寺

之墳墓邊是依□□

遺命也



* 銘文の二行目に光りを当てて見やすく加工している。

史料（五）は、嘉元三（一三〇五）年八月三十日に亡くなった極楽寺真言院住持禅意心一房の骨蔵器に記された銘文である⁴⁰。本骨蔵器は、大和額安寺（奈良県大和郡山市）の忍性五輪塔下に忍性骨蔵器の傍らに、賢明房慈濟と某氏の骨蔵器とともに、まさに寄り添うように納められていた⁴¹。忍性死後、二年後になって鎌倉極楽寺禅意の骨蔵器が額安寺の忍性墓に納められた点に、死後も忍性に仕えたいという禅意の強烈な思いや忍性との絆の強さが伺える。この点からも禅意は忍性の弟子であったと推測される。

先の銘文によれば、心一房禅意が陸奥国岩城の所生⁴²出身であることや、真言院住持を一〇年勤めて、六五歳（逆算して一二四一年の生まれ）で亡くなり、嘉元元（一三〇三）年に死去した忍性の額安寺の五輪塔と一緒に葬られたことがわかる。この禅意は、忍性の極楽寺石塔を建てる願主であった⁴²。忍性の片腕の一人であったの

だろう。

さらに注目すべきは、「宝寿抄卷一」の巻頭の文言⁴³によれば、岩城薬王寺宝寿院の禅弁（禅意と改名）という僧が「宝寿抄」を真源に「口授」し、書写させている。それは、永仁三（一二九五）年三月が最初であった。つまり、禅意はもと禅弁といい、永仁三年には岩城薬王寺（現、いわき市四倉町薬王寺）に住んでいたことがわかる。禅意は岩城薬王寺から極楽寺へ移ってきたのである。真言院の院主に招かれたとすれば、真言院は永仁五（一二九六）年に極楽寺に建立された⁴⁴ので、その頃には極楽寺に移ったことになる。

なお、弘安四（一二八二）年には、洛東にて「朝暮護身作法」を書写した金剛仏子禅弁がいる⁴⁵が、改名前の禅意である可能性はある。京都に出て密教修法を学んでいたのであろう。

ところで、禅意による真源への「宝寿抄」口授を最初に指摘した萩野三七彦氏は、禅意を「授菩薩戒弟子交名」に見える「大和国人禅意 教律房」に比定し、弘安三（一二八〇）年ころには西大寺にいて叡尊に近侍していたとする⁴⁶が、先の銘文により心一房禅意は陸奥国岩城の出身で、大和出身の教律房禅意は全くの別人であることが明らかとなった。それゆえ、永仁三年以前に出てくる禅意は、教律房禅意の可能性が高い⁴⁷。

口授を受けた真源は信濃国の出身で、円定房といい、下総大

出羽・陸奥両国における叡尊教団の展開

慈恩寺（千葉県成田市吉岡）の開山となった⁴⁸。真源は、建治二（一二七六）年近くには大慈恩寺開山となっていた⁴⁹。真源は禅意から「宝寿抄」の口授を受けるために、大慈恩寺から薬王寺へ出向いたのであろう。真源は文保元（一二三二）年八月晦日に禅意の一三回忌法要を大慈恩寺で行っているが、先の骨蔵器の銘文により禅意が嘉元三年に亡くなったことと一致する⁵⁰。真源は叡尊から直接授戒を受けた叡尊の受戒弟子だが、密教修法上は禅意が師であった。

以上、陸奥国出身者禅意が関東の叡尊教団において活躍していたのである。それでは、末寺はどういう実体であったのだろうか。

史料（六）⁵¹

奥州	長福寺 <small>岩城小川村</small>	正福院	長樂寺
	蔵勝寺	普賢院	多門院
	法善院	宗明院	金蔵院
	千手院	多福院	密蔵院
	大王寺		
	國分寺		

史料（七） * 52

奥州

長福寺岩城

（花押）

寺領四拾石

長樂寺岩城長福寺下末寺

寺領拾五石

真言宗ノ寺ヲ借申只今出入御座候

藏勝寺同長福寺下末寺

（花押）

寺領五石

普賢院同長福寺下末寺

（花押）

多門院同長福寺下末寺

（花押）

法善院同長福寺下末寺

（花押）

宗明寺同長福寺下末寺

（花押）

金藏院同長福寺下末寺

（花押）

千手院同長福寺下末寺

（花押）

多福院同長福寺下末寺

（花押）

密藏院同長福寺下末寺

（花押）

正福院泉道郡長福寺下末寺

（花押）

史料（六）は、江戸時代の写しながら、内容は一五世紀半ばの西大寺末寺を表している「西大寺末寺帳」の奥州の部分である。それによれば、岩城長福寺、正福院、長樂寺、藏勝寺、普賢院、多門院、法善院、宗明院、金藏院、千手院、多福院、密藏院、大王寺の

一三箇寺と国分寺、併せて一四箇寺が挙がっている。

史料（七）は、寛永一〇（一六三三）年三月七日付「西大寺末寺帳」で、長福寺とその末寺併せて一二箇寺が挙がっている。史料（六）では、末寺と記されていなかった長樂寺、藏勝寺などが長福寺の末寺とされている。また、大王寺や国分寺は記載されていない。大王寺と国分寺は、戦国の動乱を経て西大寺末寺から離脱したのであろう。

大王寺については史料がないので、国分寺から見よう。蒙古襲来を契機として、叡尊教団（西大寺と極楽寺）に一九箇国の国分（尼）寺（一宮も）の復興命令が出され⁵³、中興に成功した。なお、長門国分寺は、その一九箇国に入っていない⁵⁴ので、二〇箇国の国分寺・尼寺の復興が叡尊教団によってなされたと推測される。「西大寺末寺帳」には、尾張、加賀、越中、周防、長門、丹後、但馬、讃岐、伊予、因幡、伯耆の国分寺が記載されている⁵⁵。また、筑前国分寺もその可能性が高い⁵⁶。とりわけ、ここで対象としている陸奥国分寺⁵⁷も西大寺末寺であった。

ところで、先に触れたように山形県の寒河江慈恩寺には、「奥州国分寺」銘の入った柄香炉が伝わっている。それは本堂に伝わるが、それにより陸奥国分寺関係者が慈恩寺にいた可能性はあり、慈恩寺にも叡尊教団の教線が伸びていたと推測される⁵⁸。

次に注目するのは、岩城長福寺⁵⁹とその末寺である⁶⁰。先述のように、極楽寺忍性の右腕とも言える禅意が岩城出身であったので、陸奥国でも岩城地域には、布教活動は盛んであったと推測される。

長福寺は、現在の福島県いわき市小川町下小川字上ノ台に所在する。「長福寺縁起」によれば、元亨元（一二三二）年に、小河義綱が鎌倉極楽寺の了俊の弟子慈雲を招いて建立した寺院である。小河義綱は、常陸佐竹氏の一族でこの地域の領主であった。義綱は、罪を犯し、北条高時の命令で切腹させられそうになった。そこで、最後の五戒を授けるべく、極楽寺の長老（順忍）が招かれた。長老は義綱に思い残すことがあるか尋ねたところ、諏訪神社の御戸の役にあたっていたがそれができないのが心残りだと言った。長老はそれを聞いて哀れに思い、高時に命乞いをしたところ⁶¹、義綱は許された。その後、義綱は極楽寺から慈雲を小河に招いて長福寺を開いたという。ようするに義綱は鎌倉で命を救ってくれた極楽寺長老に帰依して、領地の陸奥国岩城小川に極楽寺末寺の長福寺を建てたのだが、鎌倉や京都に来ていた武士が叡尊教団の僧に帰依して自分の領地に菩提寺を建てるケースはあったのだろう。

ところで、先の東日本大震災で破損した本寺地藏菩薩座像から胎内文書や胎内銘が見つかり、元亨四（一二三四）年に院誉によって義綱の為に地藏像が造立されていることがわかった⁶²。元亨元

（一二三二）年に長福寺が建立されたとする縁起にほぼ合致している。

長福寺の末寺となった一一箇寺のうち、多門院（太慶寺）、宗明院（常慶寺）、普賢院（光明寺）、金藏院（真光院）の四つは現存するが、他は廃寺となった。まず、廃寺となった寺だが、長楽寺からみよう。

長楽寺は、現在は廃寺であるが、現在のいわき市平町宮ノ脇に明治まで所在した⁶³。江戸時代には長福寺の末寺となっていたが、寺領が一五石と四〇石の長福寺に次で多い。

蔵勝寺も、江戸時代には長福寺の末寺となっていたが、寺伝では文永二（一二六五）年七月中旬に忍性が開創したという寺で、その後、衰退していたが正慶元（一二三二）年に慈雲が中興した⁶⁴という。寛永年中に盛有が荒川に移して再興したが、明治に廃寺となった。現在、いわき市上荒川の医王寺が管理する天津観音堂に蔵勝寺旧蔵の一六善神像が伝わっている。この蔵勝寺開創時期の伝承が正しいければ、文永二年ころには、岩城地域に叡尊教団の布教が及んでいた⁶⁵可能性はある。

普賢院は、稲荷山普賢院光明寺として、いわき市四倉町狐塚に所在する。もと天台宗寺院で、正治元（一一九九）年に岩城成衡を開基、宥誉上人を開山として開かれたが、衰退し、大永元

（一五二二）年に長福寺の日雄によって中興し、真言律宗化したという。^{66）}

金藏院は、南林山金藏院真光寺といい、いわき市平赤井字窪田にある。寺伝では、正和元（一二三二）年三月二日に純雄上人により、久保田正道を開基として開かれた。^{67）}

多門院は、竜田山多聞院太慶寺といい、いわき市小川町上小川に所在するが、もとは鎌田にあったという。応保二（一一六二）年三月、鎌田正清を願主として湛海和尚によって開かれた。元龜二（一二七二）年三月に長福寺堯雄によって中興された。^{68）}

宗明院は、稲荷山総明院常慶寺といい、いわき市小川町上小川に所在する。天正年中に堯雄が開いたという。地藏堂は大永五年に建立という。^{69）}

しかし、多門院も宗明院も一五世紀半ばの西大寺末寺帳に見えるので、一五世紀の半ばには叡尊教団の寺院であったのだろう。なお、史料（六）、（七）には見えないが塩田寺も長福寺の末寺であった。^{70）}

さらに、先述した薬王寺は、仁寿年中（八五一年～八五四年）に徳一によって創建された真言宗の古刹で、明徳（一三九〇年～一三九四年）の頃に焼失し、文安三（一四四六）年に祐鏡によって再興されたという。^{71）}薬王寺禅弁（禅意）が極楽寺真言院院主に

移ったことを考えれば、永仁三（一二九五）年ころには極楽寺末の律寺で、その関係は明徳の焼失までは続いたと推測される。^{72）}

おわりに

以上の分析によって、出羽国には一三世紀後半には西大寺末寺と考えられる出羽長谷寺があり、一五世紀初頭においては現在の秋田県湯沢市に、菩提寺という西大寺直末寺が所在していたことが明かとなった。一見、出羽にたった二箇寺と思われるかもしれないが、直末寺とは西大寺の直轄寺院、換言すれば住持職の任命権を西大寺長老が握る有力寺院であり、その下に複数の末寺が存在していた点を忘れてはならない。そのことは陸奥の場合もいえる。三河国より以東の国の叡尊教団の末寺は、鎌倉極楽寺の管理下にあったと考えられる^{73）}ので、出羽長谷寺も極楽寺の管理下にあつて、本文で触れた「明徳末寺帳」などには菩提寺しか挙がっていないのであろう。

また、陸奥国には、岩城長福寺、正福院、長樂寺、蔵勝寺、普賢院、多門院、法善院、宗明院、金藏院、千手院、多福院、密藏院、大王寺の一三箇寺と国分寺、併せて一四箇寺の西大寺末寺の存在が知られ、その上、薬王寺も叡尊教団の末寺であったと考えられる。なお、一五世紀半ばになって、岩城長福寺などが「西大寺末寺帳」に見えるのは、極楽寺の衰頹によると考えられる。今後の研究の深

化に期待したい。

注

- 1 松尾剛次『中世律宗と死の文化』（吉川弘文館、二〇一〇）、『中世叡尊教団の全国的展開』（法藏館、二〇一七）、『鎌倉新仏教論と叡尊教団』（法藏館、二〇一九）など参照。
- 2 松尾『西大寺末寺帳考』（松尾『勸進と破戒の中世史』吉川弘文館、一九九五、二〇〇一年に改訂版が出たが、ここでは改訂版による）一五二頁。
- 3 前掲の松尾『中世律宗と死の文化』（前注（一））、『中世叡尊教団の全国的展開』（前注（一））、『鎌倉新仏教論と叡尊教団』（前注（一））参照。
- 4 遠藤巖『京都扶持衆小野寺氏』（日本歴史）四八五、『横手市史通史編原始古代中世』（横手市、二〇〇八）。
- 5 『山形県史 第一巻 原始・古代・中世』（山形県、一九八二）八六九頁。
- 6 『授菩薩戒弟子交名』については、拙著『日本中世の禪と律』（吉川弘文館、二〇〇三）第四章に翻刻している。
- 7 松尾『日本中世の禪と律』（前注（六））七二頁。
- 8 松尾『日本中世の禪と律』（前注（六））七三頁。
- 9 松尾『日本中世の禪と律』（前注（六））七四頁。
- 10 松尾『西大寺光明真言過去帳の紹介と分析』（松尾『鎌倉新仏教論と叡尊教団』（前注（一）））九七頁。
- 11 『日本史大事典5』（平凡社、一九九三）の葉室定嗣の項。
- 12 『律苑僧宝伝巻二二』（『大日本仏教全書一〇五』、仏書刊行会、一九一五）一四二頁。円照の活動については追塩千尋『中世南都仏教の展開』（吉川弘文館、二〇一一）第二部第二章参照。
- 13 松尾『西大寺末寺帳考』（前注（二））一五二頁。
- 14 松尾『西大寺末寺帳考』（前注（二））一三七～一四〇頁。
- 15 松尾『鎌倉新仏教論と叡尊教団』（前注（一））頁。
- 16 『西大寺代々長老名』（『西大寺関係史料（一） 諸縁起・衆首交名・末寺帳』、奈良国立文化財研究所、一九六八）七三頁。
- 17 『西大寺代々長老名』（前注（一六））七三頁。
- 18 松尾『鎌倉新仏教論と叡尊教団』（前注（一））
- 19 『山形県史 第一巻 原始・古代・中世』（前注（五））六一七頁は山形県内にあったとする。さらに、『山形県史』は、菩提寺の隣に記載された真福寺と菩提寺とを混同しているが、それは単純ミスであろう。
- 20 松尾『西大寺末寺帳考』（前注（二））一三七頁。
- 21 松尾『西大寺末寺帳考』（前注（二））一五七頁。
- 22 松尾『西大寺末寺帳考』（前注（二））一六一頁。
- 23 松尾『西大寺末寺帳考』（前注（二））一六一頁。
- 24 松尾『中世叡尊教団の全国的展開』（前注（一））三五八頁。『西大寺関係史料（一） 諸縁起・衆首交名・末寺帳』（前注（一六））にも翻刻されているが、ミスが多い。
- 25 松尾『中世叡尊教団の全国的展開』（前注（一））三五〇頁。
- 26 『横手市市史通史編原始古代中世』（前注（四））四四七頁。
- 27 『稲川町史』（稲川町教育委員会、一九八四）二二六頁。
- 28 『本荘市史通史編1』（本荘市、一九八七）四〇五頁。
- 29 『本荘市史通史編1』（前注（二八））四〇五頁。
- 30 『本荘市史通史編1』（前注（二八））四〇五頁。
- 31 『横手市市史史料編古代中世』（横手市、二〇〇六）六七四、六八八頁。
- 32 『稲川町史』（前注（二七））一一八頁。
- 33 『横手市市史史料編古代中世』（前注（三十一））六八一頁。
- 34 佐々木千代治編『稲庭小野寺氏の研究』（湯沢市昔を語る会、一九八九）一三〇頁。
- 35 誉田慶信『書評松尾剛次著『中世叡尊教団の全国的展開』（『歴史』一三一、二〇一八）五九頁。

- 36 松尾「中世都市鎌倉と寒河江・慈恩寺」〔西村山地域史の研究〕一六、一九九八）七頁。慈恩寺に禪定院という律院も存在していた（西村山地域史の研究）一六）六頁。
- 37 『中世民衆寺院の研究調査報告書1』（元興寺文化財研究所、平成二二）。また、荻野三七彦「磐城の薬王寺と金沢称名寺」〔金沢文庫研究〕九九）、「磐城の薬王寺」〔金沢文庫研究〕一一七・一一八）は岩城薬王寺に注目した貴重な研究である。
- 38 松尾「日本中世の禪と律」〔前注（6）〕七一頁。
- 39 『生誕八〇〇年記念特別展図録 忍性——救済に捧げた生涯』（奈良国立博物館、二〇一六）二六六頁の翻刻を、同書一七七頁の銘文の写真（吉沢悟氏提供）によって補正した。吉沢悟・鳥越俊行「大和・額安寺の忍性五輪塔に納められた骨蔵器群」〔鹿園雑集三三〕二〇二二）も参照。
- 40 本銘文については、『極楽律寺史（史料編）』（極楽律寺、二〇〇三）を別とすれば、『中世民衆寺院の研究調査報告書1』を初め、二行目の私が「所生」と読んだ部分が□□となつて読めていないが、本文の図のように「所生」と読むべきである。それゆえ、心（正とも読める）一房禪意が岩城で生まれたことが明かとなった。「所生」が読めなかったために、禪意が岩城にいたと解釈されてきた。岩城は誕生地で、当初は岩城の寺に入つた可能性はあるが、筑波三村寺または鎌倉極楽寺の忍性のもとで修行し、後に薬王寺の僧（長老か）となったと考えられる。
- 41 この点については、吉沢悟・鳥越俊行「大和・額安寺の忍性五輪塔に納められた骨蔵器群」〔前注（39）〕四八頁の図を参照。
- 42 『生誕八〇〇年記念特別展図録 忍性——救済に捧げた生涯』（前注（39））二六七頁。
- 43 前田元重・福島金治「金沢文庫古文書所収『宝寿抄』紙背文書について」〔金沢文庫研究〕二七〇、一九八三）一頁に翻刻、紹介されている。
- 44 松尾「忍性」（ミネルヴァ書房、二〇〇四）一六五・一六六頁。
- 45 荻野「磐城の薬王寺と金沢称名寺」〔前注（37）〕七頁。
- 46 荻野「磐城の薬王寺と金沢称名寺」〔前注（37）〕六頁。
- 47 弘安五（一二八二）年正月廿四日付で醍醐寺西南院実勝から秘法を授与された僧に「禅意 鎌倉極楽寺長老」（荻野「磐城の薬王寺と金沢称名寺」〔前注（37）〕七頁）がいる。極楽寺長老に禅意は就任しておらず、教律房禅意と東国で密教者として著名であつた心一房禅意とを混同して間違つた注記がなされたのかもしれない。
- 48 荻野「磐城の薬王寺と金沢称名寺」〔前注（37）〕三頁。
- 49 松尾「鎌倉新仏教論と叡尊教団」〔前注（1）〕二九二・二九四頁。
- 50 荻野「磐城の薬王寺と金沢称名寺」〔前注（37）〕六頁。
- 51 松尾「中世叡尊教団の全国的展開」〔前注（1）〕。
- 52 「西大寺諸国末寺帳その三」（西大寺関係史料（1）諸縁起・衆首交名・末寺帳）〔前注（16）〕一一八・一一九頁。
- 53 松尾「勧進の体制化と中世律僧」『勧進と破戒の中世史』〔前注（2）〕二七頁。
- 54 森茂暁「鎌倉末期・建武新政期の長門国分寺」〔山口県史研究〕2、一九九四）二五頁。
- 55 松尾「西大寺末寺帳考」『勧進と破戒の中世史』〔前注（2）〕一四一頁。追塩千尋「国分寺の中世的展開」（吉川弘文館、一九九六）。
- 56 京都東山太子堂が筑前国分寺を支配しており、筑前国分寺も叡尊教団によって復興された可能性が高い（松尾「中世律宗と死の文化」吉川弘文館、二〇一〇、一七六頁）。
- 57 松尾「中世叡尊教団の全国的展開」〔前注（1）〕三五八頁。
- 58 松尾「中世都市鎌倉と寒河江・慈恩寺」〔西村山地域史の研究〕〔前注（36）〕七頁。慈恩寺に禪定院という律院も存在していた（西村山地域史の研究）六頁。
- 59 長福寺については『中世民衆寺院の研究調査報告書1』〔前注（37）〕が詳しい調査を行っている。
- 60 西岡芳文・瀬谷貴之・永村眞他「福島県いわき市長福寺本尊地藏菩薩坐

像と納入文書…概報」〔金沢文庫研究三三〇〕、二〇一三。

61 『中世民衆寺院の研究調査報告書1』〈前注(37)〉八〇頁。

62 西岡芳文・瀬谷貴之・永村眞 他「福島県いわき市長福寺本尊地藏菩薩坐像と納入文書…概報」〈前注(60)〉。

63 『中世民衆寺院の研究調査報告書1』〈前注(37)〉。

64 『中世民衆寺院の研究調査報告書1』〈前注(37)〉八〇頁。

65 『中世民衆寺院の研究調査報告書1』〈前注(37)〉。

66 『中世民衆寺院の研究調査報告書1』〈前注(37)〉八九頁。

67 『中世民衆寺院の研究調査報告書1』〈前注(37)〉九一頁。

68 『中世民衆寺院の研究調査報告書1』〈前注(37)〉九一頁。

69 『中世民衆寺院の研究調査報告書1』〈前注(37)〉一〇七頁。

70 『中世民衆寺院の研究調査報告書1』〈前注(37)〉九五頁。塩田寺は、いわき市小川町字平島に所在する。寺伝によれば、正中三(一三三五)年に覚応によって開創という。

71 『中世民衆寺院の研究調査報告書1』〈前注(37)〉一二二頁。

72 荻野「磐城の薬王寺と金沢称名寺」〈前注(37)〉、「磐城の薬王寺」〈前注(37)〉参照。『いわき市史第一巻原始・古代・中世』(いわき市、一九八六)

四八四・四八五頁参照。いわき市の医王寺も真言律宗の寺という伝承がある。

73 松尾「西大寺末寺帳考」〈前注(2)〉一三七頁。

付記

本稿作成に際して、西岡芳文氏、吉沢悟氏には特段のご教示を得た。また、門間政亮氏には写真を加工していただいた。感謝の意を表します。

The Development of the Eison Order in both Dewa and Mutsu Provinces in the Medieval Japan

MATSUO Kenji

This paper clarifies the development of the Eison cult in both Dewa and Mutsu Provinces. In Dewa Province, there was a temple in the late 13th century, Dewa Hasedera, which is thought to have been a branch temple of Saidaiji in Yamato Province, and in the early 15th century, there was a branch temple in Yuzawa City, Akita Prefecture, which was also directly connected to Saidaiji and called Bodaiji. At first glance, it may seem that there were only two branch temples of Saidaiji in Dewa Province, but it should not be forgotten that these temples were under the direct control of Saidaiji, in other words, they were powerful temples where the Saidaiji elders held the authority to appoint the head priests, and there were several subordinate temples under them.

In Mutsu Province, there were 13 temples, Iwaki Chōfukuji, Shōfukuin, Chōrakuji, Zōshōji, Fugen-in, Tamon-in, Hōzen-in, Syūmyō-in, Kinzō-in, Senju-in, Tafuku-in, Mitsuzō-in, and Daiōji. Adding Kokubunji, these 14 branch temples of Saidaiji are also known to have existed. Yakuōji Temple is also thought to have been a branch temple of the Eison cult.